

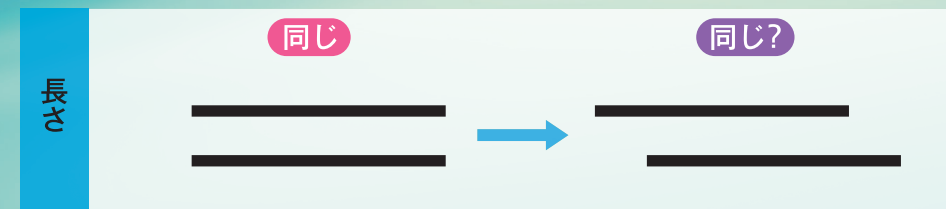
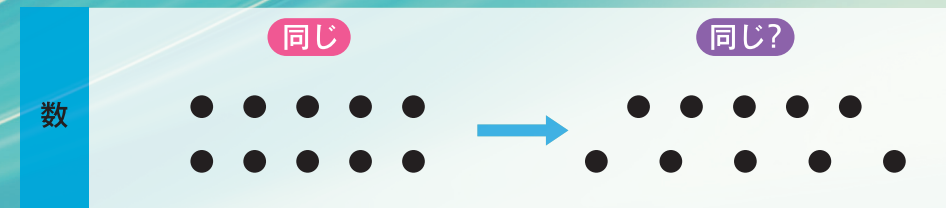
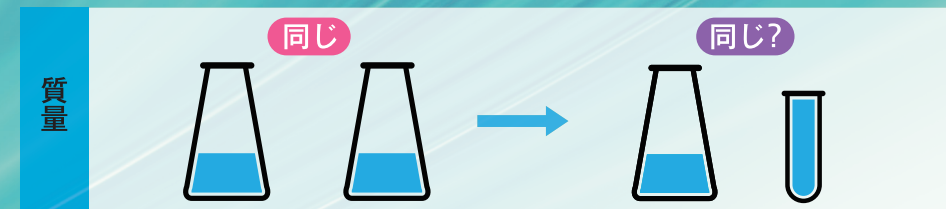
## ピアジェとエリクソンの発達理論



| ピアジェ<br>認知の発達         | 感覚運動期                      | 前操作期                            | 具体的操作期                       | 形式的操作期  |                            |
|-----------------------|----------------------------|---------------------------------|------------------------------|---|----------------------------|
|                       | 身体の動きに応じて変化する感覚でこの世界を認識する。 | 象徴機能が出現するが、自己中心性が強く、論理的思考ができない。 | 具体的なものを扱うことで、論理的思考ができるようになる。 | 具体的なものだけでなく、抽象的なものについても論理的思考ができるようになる。抽象的な概念や知識も獲得できるようになる。 |                            |
| 年齢                    | 0～2歳                       | 2～6歳                            | 6～12歳                        | 12歳以降   |                            |
|                       |                            |                                 |                              | 12～20歳  | 20歳以降                      |
| エリクソン<br>社会の中での<br>発達 | 乳児期                        | 幼児期                             | 児童期                          | 青年期   | 成人期                        |
|                       | 基本的信頼と不信                   | 自律性と恥、疑惑<br>主体性と罪悪感             | 勤勉性と劣等感                      | アイデンティティ（自我<br>同一性）の獲得と拡散                                   | 親密性と孤立<br>生殖性と停滞性<br>統合と絶望 |

## 子ども独自の思考

前操作期の子どもたちは、まだ保存の概念がないので、対象物の見かけが変わると質量や数などの特性も変わったと考える。



心理学は心と行動を操る要因を探し求めている。その1つの答えを年齢的な変化に見出そうとするのが発達心理学である。ここでは、自分が置かれている世界をどのように認識するかに関わる認知発達理論と、社会の中での発達に関わる理論を紹介しよう。

## ◆ピアジェの発達理論

まず、認知発達ではジャン・ピアジェの理論が代表的である。この理論では、子どもは「不完全な大人」として世界を見ているのではなく、「子ども独自の解釈」で世界を見ることが示されている。

ピアジェによると、2歳くらいまでの感覚運動期は泣けば誰かが来てくれる、見たものに触れると、口に含むと、そこに何かがあることがわかるといった体験を繰り返すことで、

この世界を学ぶ時期である。この時期は目の前から消えたものは本当に消滅したかのように感じられている。

1歳半から2歳くらいに始まる前操作期では、イメージや言語的な象徴化ができるようになる。目の前から消えたものも単に見えなくなっただけで、すでに消滅したとは思わない。しかし、他者の視点に立つことができないので、自分が知っていることは相手も知っていると思ったりする自己中心性がある。また、保存の概念がないので横長のピーカーから縦長のピーカーに水を移すと、「水が多くなった!」と錯覚する（人は縦方向を過大視する）。これは6～7歳まで続くと言われている。

具体的操作期になると、まず質量や数、長さといった具体的に測ったり数えたりできる数字を操作できるようになり、9～10歳を過ぎると面積や重さといった概念も操作できる

ようになる。形式的操作期では、具体的な物事が目の前になくても、「もし〇〇だったら、△△は……」といった仮定に基づく大人の思考もできるようになる。

## ◆エリクソンの発達理論

社会の中での発達については、エリク・エリクソンの理論が代表的である。エリクソンは、年齢ごとに感じる心の光と影を論じた。乳児期にはこの世界、すなわち周りの人間が安全で信頼できるものか否か（基本的信頼と不信）、運動能力が上がる幼児期には自分に何ができないか（自律性と恥、疑惑）、自分が勝手にやったことでよいことが起こるか（主体性と罪悪感）、児童期には自分は褒められるか（勤勉性と劣等感）を意識することになる。

そして、「自分は何のために生きているのか?」を意識する思春期から青年期にかけては、アイデンティティ（自我同一性）の獲得と拡散が課題になる。アイデンティティを獲得して自分のあり方を見つけ出すと自分に集中するあまり孤立するようになるので、親密な人間関係に飢えるようになってしまう（親密性と孤立）。

中年期になると、生物的にも社会的にも発展に限界を感じ、停滞感を覚えるようになるが、下の世代を育てるという「社会的な生殖性」に生きがいを見出せるかもしれない（生殖性と停滞性）。そして、人生の黄昏時には、自分が生きてきた意味が見つかればよいが、後悔ばかりが積み重なっていると人生に絶望することになる（統合と絶望）。

このように私たちの心は、年齢とともに変わっていくものなのだ。（杉山 崇）